| 群教セ | G11 － 01 |
| --- | --- |
| | 令4.281集 |
| | 特活－小 |

# 自己有用感を高め、よりよい学級や学校をつくろうとする児童の育成

## ――児童会活動と学級活動の連携を通して――

特別研修員　小金澤　俊郎

## Ⅰ　研究テーマ設定の理由

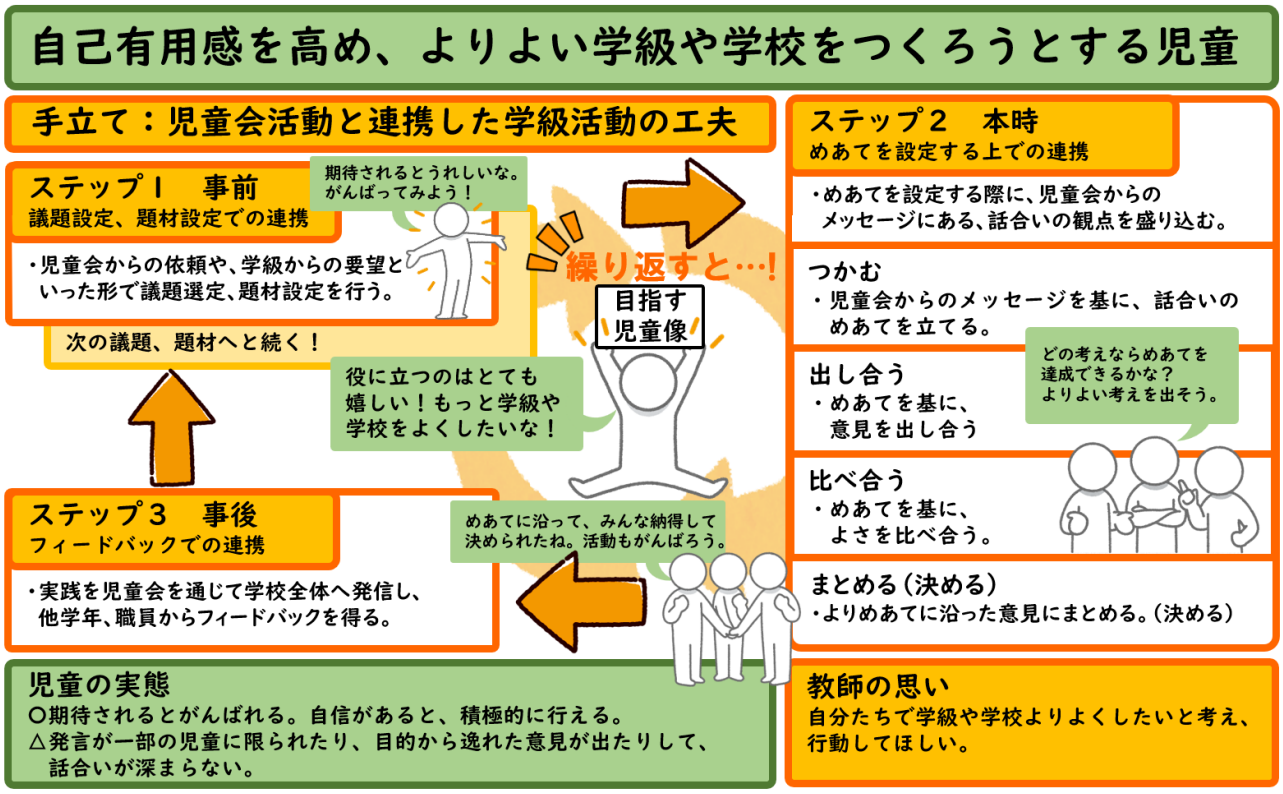
令和４年度の学校教育の指針には、合意形成や意思決定する力を伸ばすために、議題や題材が児童にとって必要感のあるものであることと、話合いに際して「よりよい学級や学校を自分たちでつくる」という視点をもつことの重要性が示されている。

研究協力校の児童は、生き生きと学校生活を送っており、期待されるとがんばれたり、自信のあることには積極的に取り組めたりするよさがある。しかしながら、話合い活動においては、発言力のある児童の意見で決まってしまったり、本来の目的から逸れた意見が出たりして、内容の深まりが見られないことが多い。

このような児童が、自分たちのよさを生かしながら「よりよい学級や学校を自分たちでつくる」という視点をもって話し合い、合意形成や意思決定を行うことができるようになるためには自分たちの話合いが役に立つことを実感し、自己有用感を高めていく必要があると考える。そのためには、目的から逸れずに話合いを深め、そこで決まったことを実践し、学級や学校によい影響を与える経験を繰り返していくことが大切である。本研究では「自己有用感」を、「自分のよさや頑張りが、みんなの役に立っているという実感をもつこと」と位置付け、その高まりを実現するには児童会活動と連携することが有効であると考え、上記のとおり研究テーマを設定した。

## Ⅱ　研究内容

### １　研究構想図



## ２　授業改善に向けた手立て

**手立て：児童会活動と連携した学級活動の工夫**
　児童会活動との連携で、目的から逸れない話合いと、自己有用感の高まりの実現を図る。

**ステップ１　事前の活動：議題選定、題材設定での連携**
　必要感のある議題選定、題材設定を行うことができるよう、児童会活動と連携する。児童会からの依頼や学級からの要望といった形で、議題選定、題材設定を行う。
　また、目的から逸れない話合いの実現につながるよう、「児童会からのお願い」としたメッセージ制作では、よさを比べる上での観点を盛り込む。
**ステップ２　本時の活動：めあてを設定する上での連携**
　話合いのめあてに沿って、目的から逸れずに合意形成や意思決定を行うことができるよう、「つかむ」場面でめあてを設定する際には、児童会からのメッセージにある、よさを比べる上での観点に気付かせ、めあてに盛り込む。
**ステップ３　事後の活動：フィードバックでの連携**
　自身の成長を感じたり、次の課題解決に生かしたりすることができるよう、決定した事への取組を、児童会を通じて学校全体へ発信し、他学年や職員からのフィードバックを得る活動を設定する。

　この一連の流れを様々な議題、題材で繰り返すことで、自己有用感の高まりを図る。自己有用感の高まりは、帰りの会での活動の振り返りや、日常生活の変容を観察することで見取る。

# Ⅲ　研究のまとめ

## １　成果

○　事前の活動での議題選定、題材設定では、年間で７回の連携を図ることができた。どの話合いの際にも、宿題とした意見カードの提出をかなり早い時間に行ったり、何度も考えて出し直したりする児童が多く見られた。これは、児童会との連携が必要感のある議題選定、題材設定につながったものと考える。また、児童会からのメッセージに話合いの観点を盛り込んだところ、計画委員会での事前調査活動を引き出すなど、本時の活動につながる布石となった。

○　本時の活動では、児童会からのメッセージに盛り込まれた話合いの観点を基にして、めあてを立てることができた。話合いの中ではすべてのプロセスでめあてを意識した発言が多く出ていたため、目的から逸れずに合意形成を図る上で有効であったと考える。

○　事後の活動では、どの活動でも主体的な姿勢が見られた。児童にとって公のものと感じられる校内Web ページに自分たちの姿が掲載され、活動が称賛されるという経験は、児童の自己有用感を高めることにつながったと考える。

○　児童会との連携を繰り返し行うことで、目的から逸れずに合意形成に達し、全員が納得している様子が見られることが増えるなど、話合いに深まりが生じた。お互いの主張を譲ることができずに終わった話合いもあったが、年度当初は一部の影響力のある児童の意見で決まったり、目的から逸れてしまったりしていた実態を考えると、それも児童の成長であると考える。また、頼りにされる経験を繰り返すことで、係活動の内容が学級や学校を意識したものに変わるなど、日常の中でも変容が見られるようになった。

○　児童会活動と連携した学級活動の工夫は、目的から逸れない話合いの実現と、児童の「自分のよさや頑張りが、みんなの役に立っている」という実感につながり、よりよい学級や学校をつくろうとする姿を促す上で有効であったと考える。

## ２　課題

○　より有効な形で連携させるためには、クラブ活動や学校行事も含め、特別活動全体の連携を更に進めていくとよい。

**実践例**

**１　議題名**　「人権月間の取組で１、２年生と協力しよう」学級活動(1)（第３学年・２学期）

**２　本議題について**

本時のめあては、「１、２年生も楽しめて、やってくれる人がふえるような取組を考えよう。」である。児童会から、「１学期に取り組んだ活動では、３・４年生が新しい活動を考えてくれたので盛り上がった。人権月間での取組も、３年生からアイデアを募集したい。」という課題が出された。そこで、３年生としてどんなことに取り組めるかについて話し合う活動である。学校の課題について話し合い、決まったことを実践して校内に発信していくことで、自分たちの話合いが学校をよりよくしていく実感をもてると考え、以下のような指導計画を構想し実践した。

| | |
|---|---|
| 目標 | (1)　知識及び技能<br>・学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付けることができる。<br>(2)　思考力、判断力、表現力等<br>・学級や学校の生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができる。<br>(3)　学びに向かう力、人間性等<br>・生活上の諸問題の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。 |
| 評価規準 | (1)　よりよい生活を築くための知識・技能<br>・みんなで楽しい学級生活をつくるために他者と協働して取り組むことの意義や、意見の比べ方やまとめ方を理解し、活動の方法を身に付けている。<br>(2)　集団や社会の形成者としての思考・判断・表現<br>・楽しい学級生活をつくるために、問題を発見し、解決方法について理由などを比べ合いながら合意形成を図り、協力し合って実践している。<br>(3)　主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度<br>・楽しい学級生活をつくるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己の考えを生かし役割を果たして、他者と協働しながら集団活動に取り組もうとしている。 |
| 過程 | 主な学習活動 |
| 事前の活動 | ・代表委員会で、人権月間に向けての方針や課題を確認し、議題につなげる。<br>・児童会からのビデオメッセージを制作し、話合いのめあてにつなげる。<br>・議題に関するアンケート調査やインタビュー取材を行う。<br>・議題について自分の考えや理由を記入し、学習支援ソフトを活用して事前に提出する。 |
| 本時の活動 | ・児童会からのお願いとしたビデオメッセージや、計画委員の調査から本時のめあてを立てる。<br>・会議の進め方に沿って話し合う。<br>・各場面で学習支援ソフトを活用しながら合意形成を図る。 |
| 事後の活動 | ・話合いで決定した事を実践する。<br>・実践の様子は学級代表委員会が取材し、校内Web ページに掲載することで校内全体に発信する。<br>・校内Web ページには意見箱を用意し、そこに書かれた内容をフィードバックに生かす。<br>・フィードバックを得た後の感想や、実践への振り返りを帰りの会で伝え合う。 |

**３　本時及び具体化した手立てについて**

本議題は、１学期に児童会から依頼されて行った話合いとのつながりがある。１学期は３、４年生が活躍し、学校全体の活動を活性化することができた。そこで、代表委員会からは、今回の活動では１、２年生も協力してほしいという意見が出された。それを受けて、自分たちががんばるだけではなく、１、２年生のことも考えて合意形成を図る必要がある議題となった。自分たちの思いに加え、１、２年生の思いも大切にしながら合意形成が図れるよう、次のような手立てを具体化した。

**手立て：児童会活動と連携した学級活動の工夫**

児童会活動との連携で、目的から逸れない話合いと、自己有用感の高まりの実現を図る。

**ステップ１　事前の活動：議題選定、題材設定での連携**

より必要感をもって活動に取り組めるよう、学校全体に関わる人権月間での取組について話合う議題設定を行う。また、目的から逸れない話合いの実現につながるよう、児童会からのメッセージには、「１、２年生と協力できる工夫」という観点を盛り込んだ。これにより、自分たちだけではなく１、２年生の思いを大切にしながら合意形成を図る必要性をもたせる。

**ステップ２　本時の活動：めあてを設定する上での連携**

話合いのめあてに沿って、目的から逸れずに合意形成や意思決定を行うことができるよう、「つかむ」場面でめあてを設定する際には、児童会からのメッセージにある、よさを比べる上での観点に気付かせ、めあてに盛り込む。

**ステップ３　事後の活動：フィードバックでの連携**

自身の成長を感じたり、次の課題解決に生かしたりすることができるよう、実践の様子を児童会が取材し、校内Webページに掲載することで校内全体に発信する。また、校内Webページに意見箱を用意したり、アンケートを取ったりすることで、書かれた内容をフィードバックに生かす。

## 4　授業の実際

### (1)　事前の活動

本実践では、児童会からの依頼という形での議題設定を行ったところ、各場面で以下のような児童の姿が見られた。

図１　メッセージの１コマ

#### ①　児童会活動

今回の活動では１、２年生にも協力して欲しいという思いが追加され、児童会としての希望や活動への思いを、話合いの観点として盛り込んだビデオメッセージを制作した（図１）。

#### ②　計画委員会

計画委員の話合いで児童会からのお願いとしたビデオメッセージの視聴を行ったところ、「やるに決まっている。」、「やる気がみなぎっている。」等の発言が見られた。また、児童会からの「１、２年生と協力できる工夫を」という願いに対し、アンケートや取材による１、２年生の希望や実態の調査が提案され、実行することができた（図２）。

図２　計画委員の話合い

以上のことから、児童会活動と連携して議題設定を行ったことは、児童の「自分たちが学校全体に関わることを任されている。」という実感につながり、より主体的な行動を引き出したものと考える。

### (2)　本時の活動

児童会としての方針や思いが伝わるよう、ビデオメッセージに話合いの中でよさを比べ合う上での観点を盛り込んだところ、話合いの各場面で以下のような児童の姿が見られた。

#### ①　つかむ場面

授業の導入として児童会からのお願いとしたビデオメッセージの視聴を行ったところ、児童はビデオメッセージに込められた、児童会としての希望や活動への思いを基に「１、２年生も楽しめて、やってくれる人がふえるような取組を考えよう。」というめあてを立てることができた（図３）。

図３　つかむ過程

#### ②　出し合う場面

学習支援ソフトを活用して事前に提出された意見カードを基に意見を伝え合った。カードには事前に理由も書き込んでいたが、立てためあてから理由を追加して話し合う様子が見られた。

#### ③　比べ合う場面

学習支援ソフトを活用しながら、似た意見をまとめて仲間分けを行った。その後、まとめた意見ごとによさを比べ合った際には、「郵便配達なら、集めるのが３年生、配るのが１、２年生で協力しやすいから、郵便がいいと思う。」等、めあてを意識した発言が多く見られた（図４）。

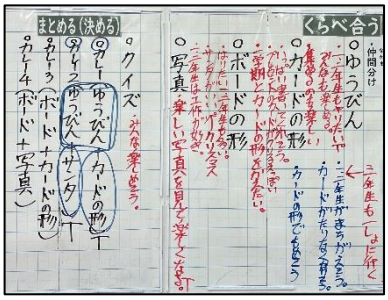



図４　比べ合う・まとめる場面の板書

#### ④　まとめる（決める）場面

合意形成に至るまでの間、アンケート結果に沿うような意見を選んだり、比べ合ったよさを合わせたりするなど、めあてを意識した発言が多く見られた（図４）。

以上のことから、児童会からのメッセージに話合いの中でよさを比べ合う上での観点を盛り込むことによって、児童はめあてをより重要なものと捉え、話合いの全てのプロセスにおいて、目的から逸れずに話し合うことができたと考える。

### (3)　事後の活動

実践の様子を代表委員会が取材し、校内Webページに掲載することで校内全体に発信したり、他学年や職員からのフィードバックを得る活動を設定したりしたところ、各場面で以下のような児童の姿が見られた。

#### ①　決めたことの実践

準備作業を昼休みに自主的に行ったり、「みんなのためにもっとよくしたい。」、「みんながもっと書きたくなるようにしたい。」という発言が出たりと、話合いで決定したことに対して前向きな姿勢が見られた。実践でも、カードを集める活動に嬉しそうに取り組んでいた（図５）。また、１・２年生がカードの配達に出かける場面でも、自主的に着替えを手伝ったり、各教室に入るときに何と言うべきかアドバイスしたりする様子が見られた。

図５　決めたことの実践の様子

#### ②　振り返り

帰りの会で校内Webページを見たり、担任が意見箱に届いた感謝のメッセージを読むのを聞いたりした後には、「僕たちも学校のために活躍できたね。」や、「次の活動も頑張りたい。」などの発言があった（図６）。また、放課後に再度QRコードを読み込んで校内Webページを見ていた児童からは、「代表委員会に入って、もっとよい学校にしたい。」という発言が見られた。

図６　校内Webページを見る様子

以上のことから、児童会活動を通じて活動の様子を学校全体へ発信し、他学年や職員からのフィードバックを得る活動を行ったことは、児童にとって公のものと感じられる校内Webページに自分たちの姿が掲載され、活動が称賛されるという事実を生み、それが児童の自己有用感を高めることにつながったと考える。

## ５　考察

事前の活動では、児童会からのメッセージに話合いの観点を盛り込んだことが、本時の活動におけるめあてをつかむことにつながったと考える。このことが、目的から逸れずに話し合い、合意形成することにつながり、決まった活動を実践し称賛されることで、児童の自己有用感は大いに高まったと考える。さらに、年間を通じて児童会との連携を繰り返してきたことによって、「以前の実践における自分たちの取組が認められ、再度協力を依頼された。」という好循環が生まれ、児童が「自分たちの活動が学校の役に立っている。」という実感をもつことにつながったと考える。

さらに、児童の変容は日常の生活の中でも見られるようになった。年度当初から行っている係活動では、１学期には自分たちが楽しむことが優先された内容だったものが、学級や学校の役に立ちたいという内容に変わってきた。これは、「みんなの役に立てた。」という経験を積むことで、さらに違う場面でも役立ちたいと思えるようになった結果だと考える（図７・８）。

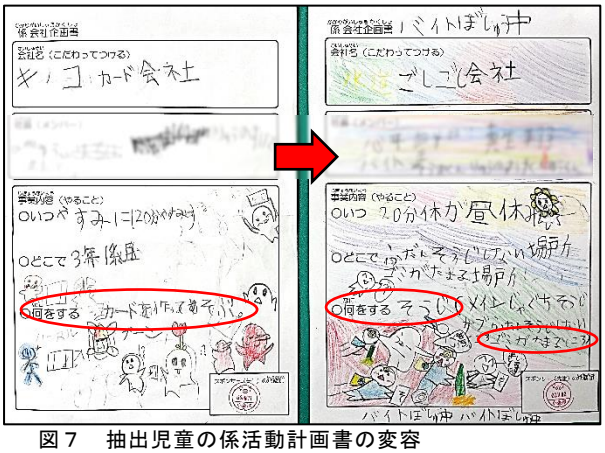


図７　抽出児童の係活動計画書の変容

図８　変容した係活動の実践の様子